

東京市水道の導水路改築工事 主として鋼管接手の現場溶接に就て

東京市水道局擴張課長 小野基樹

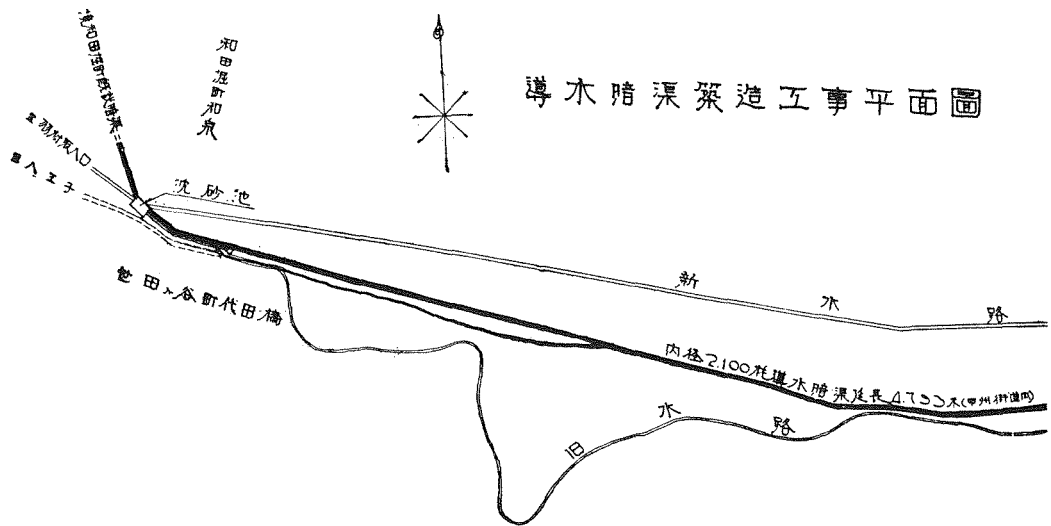
工事沿革

東京市水道の淀橋浄水場から約1里3町程西方に當つて世田ヶ谷町に代田と云ふ所がある、今から遠く約280年程遡つた徳川三代將軍家光公の時代に江戸の城下が日に殷賑を加へ、用水に欠乏を告ぐるに至り、其の當時水利に詳しかつた庄右衛門、清右衛門兄弟が召し出されて、羽村から蜿々10里の水路を開鑿して上述の代田迄來て此處から直線路をとつて淀橋迄導けば近距離であつたが、其の途中には低濕地が横つて居るので、之を避けて南方に大迂回路を取つて、淀橋を経て大木戸迄達せしめた總延長十餘里の上水路が、即ち世界の工事史にも稱揚せられておる、有名な玉川上水であることは人のよく知れるところである。(第1圖参照)

然るに明治25年頃改良水道創設の議が起るに及んで、淀橋の高地に浄水場の敷地を選び

以て市内給水に高い水壓を保たしむると云ふ設計に依つた關係からして、上述代田から上流は舊來の玉川上水路によりそれから下流は特に直線路を選んで、低濕地には盛土をなし、地勢の最も低い個處を横ぎるには築堤の高さが30餘尺にもなつたが、頗る入念に施工して其の堤上に約150個を流し得る混凝土張開渠を完成せしめたのである。其の延長は代田から淀橋に至る2350間で之を爾來新水路と名づけ代田からの在來の迂回路を舊水路と名づけ來つた此の新水路は明治30年に通水を始め、爾來約25年間は何等の故障も無く、所期の目的を達し汎く帝都の人々に潤澤な水を供給して來たのであるが、大正10年12月に至つて餘り世人の記憶にも残つて居ない程度地震の爲めに、最も高い築堤の個所が俄然崩壊し通水は忽ちに止まり、盛土は流逸して附近にも慘害を及ぼした。此の新水路は當時唯一の東京市水道の命脈の綱であつたが爲めに、市内

第1圖 導水暗渠築造工事平面圖



導水暗渠築造工事平面圖